

シュメール語の動詞複数語基について*

森 若葉

はじめに

本稿はシュメール語¹⁾において従来「複数動詞」と呼ばれる動詞の形式と意味機能についてまとめたものである。本稿では複数語基という用語を用いる。動詞における複数表現は三通りの方法があることが知られている。そのうちの一つが複数語基(複数のための補充的な語基)を使う方法である。あと二つは *hamṭu*²⁾ reduplication (動詞語根の重複)によるものと動詞の人称接尾辞によるものである。複数語基には {durun}「住む・座る」(対応する単数形式は{tuš}、以下同様)、{sug}「立つ」({gub})、{sub}/{ere}「行く」({gin})、{lah}「連れる・運ぶ」({tum})、{se}「生きる・いる」({ti})がある³⁾。これらの動詞はバビロ

* 京都大学人文科学研究所教授前川和也先生に多岐にわたり様々なご教示をいただいた。深く感謝する。

- 1) シュメール語は古代メソポタミアの言語で、粘土板を中心に十万点を越える楔形文字資料が発見されている。系統関係は不明で、メソポタミア南部で共存関係にあったアッカド語との接触による影響がみられる。前2000年頃以後の後期の文献はアッカド語など他言語を母語とする書記によって記されたと考えられる。本稿では前2500年頃から前二千年紀までの資料を扱う。資料はおおきく初期王朝期(前2500年頃から前2350年頃)、アッカド期(前2350年頃から前2200年頃)、Ur III期(前2200年頃から前2000年頃)、前二千年紀(=後期)(前2000年以降)に分けて示す。
- 2) *hamṭu* は、シュメール語を記述するために用いられた新バビロニアの文法述語である。*hamṭu* は perfective アスペクトを、対立する *marû* は imperfective アスペクトを表す。*hamṭu* 形式は基本的に語根と同一形式である。*marû* 形式の形成法は1. 語根に -e を付す。2. 語根を繰り返す。3. 補充法の三つのタイプがある。1のタイプが最も多く、どの形成法をとるかは、動詞ごとにある程度傾向が定まっている。
- 3) 文法テキストに「複数」との記述がないが、複数語基である可能性が議論される動詞には以下のようなものがある。{e}「言う」[dug₁ (sg)] [Edzard 1966; Thomsen 1984]、{sun}(sun₂)「入る」[ku, (sg)] [Civil, AS 20 (1975:150, n.44)]、{ug}[ug₅ (SIR₂xUS₂)/ ug, (US₂)]「死ぬ・殺す」[Steinkeller 1979; Thomsen 1984]、{be}[be₃ (BA.BA)]「配る」[ba (sg)] [Sollberger, JCS 10 (1956); Edzard, ZA 66 (1976)]。さらに目的語の複数性に関して ra が DU と交替するとの J.Bauer, WO 6 (1971)の議論がある。

ニア人によってアッカド語で「複数」⁴⁾と説明される。ただし複数性の表示は義務的ではなく、対応する複数語基が存在する場合でも、単数の動詞が用いられることもある。

従来の研究においては、複数語基と *hamtu* reduplication はともに絶対格名詞の複数性を示すとの見方が一般的である⁵⁾。Steinkeller 1979 によると自動詞主語と他動詞目的語の複数性は複数語基か動詞の重複によって表示される。本稿ではまた複数語基と三人称複数有生接尾辞の {eš} と {ne} が共起する例をとりあげて議論を行う⁶⁾。この {eš} と {ne} はともに三人称複数有生接尾辞であるが、動詞のアスペクトによって分布が異なり、主語が目的語に一致するとする説が一般的である。

本稿では複数語基の形式を、時期別に整理し、その考察を行い、先行研究の問題点を指摘する。複数語基と三人称複数接尾辞が共起する例において、それぞれ別の複数性にかかわる例を示し、それらの複数性が異なるものであることを論ずる。複数語基の複数性はつねに絶対格名詞句に関わるという一般的な説に対し、複数語基の複数性は統語的に定義される主語や目的語に対応するものではなく、その複数性は複数語基ごとにきまった特定の項に関与するものであることを主張する。そして複数語基と {eš} は共にあらわれるが、{ne} が複数語基に後続することはないことを確認し、複数語基のアスペクトについても考察を行う。

以下の から においてそれぞれの複数語基をみる。

{durun} 「住む・座る」

tuš(TUŠ)「座る・住む(単数)」に対応する複数語基である。表記は初期王朝期からアッカド期が *durun_x* (TUŠ.TUŠ)⁷⁾、Ur III 期が *du₂-*

- 4) 新バビロニア文法テキスト(NBGT)に DIŠ「単数」と対立して MEŠ「複数」と説明される。例文(1)を参照。
- 5) シュメール語は基本的に能格型の格標示をとる。他動詞主語は-e接辞をとむなうが、自動詞主語と他動詞目的語はゼロ標示である。例外も多いが、アスペクトによる split ergative がみられるという説をとる研究者が多い。
- 6) 複数語基と他の複数表示との共起関係については、有生物が複数である場合、動詞による差はあるが、三人称複数接尾辞{eš}を伴う傾向にあり、また複数語基は重複しうる。
- 7) Ur III 期より古いテキストについてほぼ規則的に *durun.durun* (TUŠ.TUŠ) があらわれることから、Steinkeller 1979: 55, n.6 が *durun_x* の読みを提案している。

ru-un、後期(前二千年紀)は主として dur₂(TUŠ)-ru-un である。

前一千年紀にバビロニア人が作成した新バビロニア文法テキスト(NBGT)では tuš と dur₂-ru-un がともに ašābu「座る・住む」を意味し、tuš は「単数(DIŠ)、hamtu」と、dur₂-ru-un については「複数(MEŠ)、hamtu と marû」と記される。MIN は「上記に同じ」を意味するサインである。

(1) NBGT II 11-12 [MSL IV, 148-149]⁸⁾

^{tu-uš}TUŠ = a-šab DIŠ ha-am-tu₂ 「座る・住む 単数 hamtu」
 dur₂-ru-un = MIN MEŠ ha-am-tu₂ u ma-ru-u₂
 「座る・住む 複数 hamtu と marû」

以下の例文で、複数語基の複数性に対応する事物の統語的な関係にかかわらず、{durun}の複数性が「座すもの」に関与することを確認する。

1 有生物の複数性を表示する{durun}

「座る・住む」を意味する複数語基{durun}が有生物の複数性を表示する例をあげる。シュメール語の名詞は有生クラスと無生クラスに分けられる。有生クラスには人あるいは神、無生クラスには人と神以外の動物を含む事物が属する。初期王朝期の段階では、「座る」の複数語基は durun_x(TUŠ.TUŠ)と TUŠ を横に並べて書く⁹⁾。

(2) Nik 10:2(類例: i₃-durun_x(TUŠ.TUŠ)-eš₂ [DP 612: V3])(初期王朝期)
 /420 人/¹⁰⁾ NINA^{ki}-na durun_x(TUŠ.TUŠ)-na-me

8) 翻字において斜体字はアッカド語であることを示す。大文字の翻字は、シュメール語においては(読みが確定しない)サインの代表的音価を、アッカド語テキストにおいてはシュメール語のイデオグラムをあらわす。右下の数字は同音異綴のサインを区別するための番号であり、左右肩の文字はサインの読み(の一部)であるかその語の種類を示す限定詞である。[]はテキスト欠損部の補いを、^xは文字が一部欠けていることを、x は一つのサインが読めない状態にあることを示す。

9) ただし Fara 文書では複数語基と考えられる TUŠ.TUŠ や DU.DU のサインについて、TUŠ や DU を横に並べたものと縦に並べたものの両方がみられる。Fara 文書や同時期のいくつかのテキストについては、読み書きにおけるサインの順番が確定していないことから、本稿では考察の対象としない。

10) //は例文を簡略化したことを示す。

420 人は NINA に住むものたちである。

- (3) *ITT* I 363:7-9 (類例: i_3 -**durun_x**(**TUŠ.TUŠ**)-**ne₂-eš₂**
[*ITT* I 1182:11; 1436:8; 1463:15'他]) (アッカド期)
dumu-šuruppag^{ki}-me lagaš^{ki}-a!(ME) ib_2 -**durun_x**(**TUŠ.TUŠ**)-**ne₂-eš₂**
彼らはシュルツパクのものたちである。彼らはラガシュに住んだ。
- (4) Falkenstein, *NG* 214:41 [*TCL* V 6047:41] (Ur III 期)
/複数の奴隷/ ki -dam-a-ne-a-ti-ka i_3 -**du₂-ru-ne₂-ša-am₃**
複数の奴隷たちが Ane'ati の妻のところにいる。
- (5) Ali, *Sumerian Letters* B:20, 5-6 (前二千年紀)
 lu_2 -tur igi -zu-še₃ al-**TUŠ-un-na** e_2 -dub-ba-a-ta na-ab-ta- e_3 -en
あなたの前に座る若い人達を、あなたは学校から出してはならない。
- (6) Ur-Nammu A 82 [Flückiger-Hawker, *OBO* 166] (前二千年紀)
 ur -^dnammu $giš$ bun-gal-gal-la ba-ši-in-**TUŠ-ru-ne-eš**
Ur-Nammu 王が彼らを大きな宴に座らせた。
- (7) Hallo, *The Royal Correspondence of Larsa III* (1991) 1.48 (前二千年紀)
 ir_2 a-nir-ra-zu ga_2 im-ma-an-šir₃ ga_2 -ra im-ma-an-**TUŠ-nu**
私はあなたの哀歌を歌う。私のために彼らは座るだろうか？
- (8) Michalowski, *Royal Correspondence* 21
[Puzur-Šulgi to Ibbi-Sîn] 1.22 前二千年紀)
 gi_6 -par-ra ne-ne-a ga - ib_2 -**TUŠ-TUŠ** (var. ga - bi_2 - ib -**TUŠ-ru-TUŠ**)
Giparu に私は彼らを住まわせる。
- (9) Alster, *PAS* 6.50 (Ni 1300 o.13) (前二千年紀)
[a-ba-a] m_3 šir₃-e **TUŠ-TUŠ-ru-da** mu-un-[...]
Alster: Who [sailed(?) it] while singing a song?

他には以下のような例がみられる。

ab-durun_x(TUŠ.TUŠ)-ne₂-eš₂[*ITT* I 1100:15]; [i₃]-durun_x (TUŠ.TUŠ)-eš₂[Sollberger, *TCS* I 6:6] (アッカド期); ib-du₂-ru-ne₂-eš [*TCS* I 203:1-4 (Fish, *MCS*, 3 p.1, No.1) (= 吉川 1979: 685)] (Ur III 期); mu-un-TUŠ-ru-un-ne-eš[Hallo, *The Royal Correspondence of Larsa* III (1991) 1.30]; im-mi-in-TUŠ-TUŠ-ru-ne-eš[Kramer, *BASOR* ss. 1.220 (= 吉川 1979: 685)]; im-mi-in-TUŠ-TUŠ-ne-eš[Enki et Ninhursaga 220 [Attinger, *ZA* 74]]; i₃-TUŠ-ru-ne[Alster, *PAS* 8. Sec.B2]; ba-an-TUŠ-ru-ne-eš[Berlin, *Enmerkar and Ensuhkeš-danna* 217]; TUŠ-ru-na- ba [Cavigneaux et Al-Rawi, *Gilgameš et la mort*, Meturan 193 (M₂ iv)]; im-ma-ni-in-TUŠ-ru[Lugalbanda I 373-374 [ETCSL¹¹1.8.2.1]]; nu-mu-un-TUŠ-ru[Cohen, *ELA* 21] (前二千年紀)

初期王朝期からアッカド期にかけて、後続するサインに n があらわれ、すなわち durun としての読みが明確な場合¹²⁾、規則的に TUŠ サインを並べて書くことがわかる。よってこの時期の TUŠ.TUŠ については、{durun}の重複というより、TUŠ.TUŠ で一つの形態(durun_x)ととらえる方が適切である。次に Ur III 期の表記は du₂-ru-un と分かち書きである¹³⁾。そして後期文学作品における{durun}は TUŠ サインが用いられるが、表記法は次のように多様で複雑である。

[後期の{durun}の形式]	TUŠ-ru	TUŠ-TUŠ-ru
	TUŠ-ru.(u)n	TUŠ-TUŠ-ru.(u)n
	TUŠ-un	TUŠ-ru-TUŠ
	TUŠ.n	TUŠ-TUŠ.n

11) ETCSL ウェブサイトはオクスフォード大学の J. Black が中心となり、シュメール語の文学作品の翻字、翻訳、参考文献を公開しているものである。このプロジェクトはまだ完了していないが、未公開資料も含め、シュメール語の多くの文学作品が利用できる。(http://www-etcs1.orient.ox.ac.uk)

12) n 音が明示されていない(8)や(9)、(14)の動詞形式を複数語基ととらない見方もある。それは「座る」の単数・marù の形式を dur₂ と仮定する場合で、上記の形式は単数の形式ととらえられる。

13) Šulgi E 102 に分かち書きがみられる。ninda igi du₂-ru-na-bi šu bi₂-[ri-ri]

後期の{durun}の形式は TUŠ.n もしくは TUŠ-ru.n で読みは duru(n) が想定される¹⁴⁾。TUŠ.TUŠ については、初期王朝期からアッカド期の場合はその規則性から durun_x としたが、後期の場合は重複に規則性がみられないため、複数語基{durun}の重複と考える。

末尾の n については、後期は基本的に後続要素がなければ n を表記せず、後続要素がある場合は n を書き表す傾向にあるといえる。これらの{durun}の表記については次の2節における{durun}の複数性が無生物に關与する場合でも同じ傾向がみられる。

三人称複数有生接尾辞の{eš}は分かち書きもみられるが、アッカド期までは基本的に eš₂ で表記され、その後 eš に変化する。{eš}は hamtu 形式に後続するとの見方が一般的であるが、筆者は marû 形式にも後続すると考える。これについては 3 で述べる。有生物の場合、自動詞的であれ、使役的であれ、{durun}は動作者である「座すもの」の複数性に關与する。(6)や(8)のような使役的な文においても複数語基が他動詞主語(使役者)の複数性を示すことはない。またアスペクトについては(9)の例が-da の前に用いられことから、marû 形式である可能性が高いと考えられる。

2 無生物の複数性を表示する{durun}

{durun}が無生物の複数性を示す場合である。以下のように「座すもの」が動物や事物など無生物の場合複数語基に{eš}が後続する例はみられない¹⁵⁾。

(10) Sollberger, *Corpus En.I* 2 iii 2-3 (初期王朝期)

ur-ha-lu-ub₂ i₃-du₈-še₃ mu-na-durun₂(TUŠ.TUŠ)-na

haluppu の木で作られた犬(複数)を門番として彼のために座らせた。

14) 後期の{durun}の適切な翻字については今後の課題とする。

15) ただし筆者は{durun}が使役的に用いられるとき、無生物の複数性の場合でも{durun}に{eš}は後続しようと仮定している。その理由としては、複数語基{sug}と{lah}について、複数語基と三人称複数接尾辞がそれぞれ別の複数性を表示する事例が確認できるためである。{sug}については(25)(26)を、{lah}については(57)(58)で例をみる。

- (11) *Nik* II 53:3-4 (アッカド期)
 udu bar-a i₃-**durun_x**(**TUŠ.TUŠ**)-nam
 羊を別に住ませた。
- (12) Gudea Cyl.A viii 8-9 [Edzard, *RIME* 3/1] (Ur III 期)
 udu i₃ gukkal maš₂ niga ensi₂-ke₄ ^{M₁₂}AŠ₂.GAR₃ giš
 nu-zu su-ba mi-ni-**durun_x**(**TUŠ.TUŠ**)¹⁶⁾
 エンシは複数の家畜を未経産の若い雌ヤギのところに[?]住ませた。
- (13) *MVN* XVI 711, Vs.1-2 (類例: *MVN* XVI 715, Vs.3; Gudea Cyl.A
 xxvi 27 **du₂-ru-na-am₃** 他) (Ur III 期)
 0.1.0.0 še ša₃-gal uz-tur e₂-maš-a **du₂-ru-na**
 Emaš にいる Uztur 鳥への食料 60 シラ
- (14) Michalowski, Royal Correspondence 21 (Puzur-Šulgi to Ibbi-Sîn)
 1.13 (前二千年紀)
 nam-ra-ak-ne-ne ak-de₃ uru-uru-bi **TUŠ.TUŠ**-u₃-de₃
 Michalowski: I shall despoil (these places) and (re)settle them.
- (15) Inanna and Bilulu 51 [Jacobsen and Kramer, *JNES* 12(1953);
 ETCSL 1.4.4] (前二千年紀)
 kaš ud-re ud-su₃-ra₂ **TUŠ**¹⁷⁾-**ru-na-bi-a**
 ビールが遠い日、遠い日からおいてあり、

他の例：

du₂-ru-na-bi[Gudea Cyl.A xxix 8; Cyl.B xvi 9; Cyl.B xvi 18[Edzard, *RIME* 3/1]; *NG* 120a:3]; i₃-**du₂-[ru]-un** [*NG* 138: 8-9[Ur III 期] ba-ra-mu-un-**TUŠ-ru(-un)**][*LUr* 362 [Kramer, *AS* 12]] (前二千年紀)

16) 末尾に n がいないため、{durun}であるとは確定できないが、{durun}である
 とすると、初期王朝期の書記法に従って durun_x と書いている可能性と、
 {durun}の重複の両方の可能性が考えられる。

17) Jacobsen and Kramer, *JNES* 12(1953)の翻字は dur₃ とあるが、粘土板のこ
 ビーの楔形文字は dur₂(TUŠ)である。

無生物の複数性を表示する場合の{durun}は「(複数の動物が)いる」もしくは「(複数のもの)をおく・(複数のもの)がある」を意味し、有生物の場合も含め、複数の事物が「座す」ことを意味するといえる。

{durun}{dur₂-ru-un}はNBGTの記述によると、「hamṣu と marû」である。この解釈は難しいが、後期の例(7)や i₃-TUŠ-ru-ne[Alster, PAS 8. Sec.B 2]において、{durun}に marû 標識{e}が後続し、この場合の動詞が marû アスペクトであることが確認できる。{durun}に三人称複数接尾辞の{eš}は後続するが、三人称複数接尾辞の{ne}はみられない。以下で確認するが、他の複数語基においても{ne}が後続する例はない。

{durun}はその文が他動詞的であるか自動詞的であるかにかかわらず、「座すもの」の複数性を表示する¹⁸⁾。複数性の関与について有生性による区別はない。他の複数語基においてもその複数性が関与する項は複数語基によって意味的に規定されていることを確認する。

{sug} 「立つ」

gub「立つ、従事する(単数)」に対応する複数語基である。gubがDUと書かれるのに対し、基本的にDUを二つ書いて表記する。初期王朝期は su_x(DU.DU)¹⁹⁾で、Ur III期の裁判文書とゲデア円筒碑文では šu₄と表記する。後期には su₆(DU:DU)で表記され、後続のgを明示する表記として su₆-ge、su₆-ga、su₆-ugが用いられる。の{durun}「座る」の場合と同様に、{sug}も統語的な関係にかかわらず、「立つもの」の複数性を表示することを確認する。NBGTの記述は次の通りである。

18) シュメール語は格関係を示すために後置詞を用いるが、名詞句から格接辞が落ちることがしばしばあり、さらに名詞句そのものが省略されることも多い。また動詞は語根自体に他動詞、自動詞の別はなく、一定の傾向はあるものの自動詞文にも他動詞文にもなりうる。シュメール語の文の統語構造には多数かつ多様な動詞接辞が関与すると考えられるが、これらの動詞接辞の意味機能は現在のところ不明な部分が多い。

19) su_x(DU.DU)をDU:DUと区別せず、su₆と翻字することもあるが、本稿では区別が確認できるものについては su_x(DU.DU)と表記する。DU:DUなどサインの間にコロンを書く場合は、そのサインが縦に並んで一つのサインであることを示す。またDU.DUのようにサインの間にピリオドがある表記はそのサインが横に並んで一つのサインであることをあらわす。

(16) NBGT II i 5-6 [MSL IV, p.148]

^{gu-ub}DU = *u₂-zu-uz* DIŠ *ha-am-tu₂* 「立つ 単数 *hamtu*」
^{su-ug}DU:DU = *u₂-zu-uz* MEŠ *ma-ru-u₂* 「立つ 複数 *marû*」

1 有生物の複数性を表示する{sug}

初期王朝期では *su_x*(DU.DU)、グデア円筒碑文と Ur III 期の裁判文書では *š_u₄*、Ur III 期以降の他の文書では *su_s*(DU:DU)であられる。類似の例が非常に多いため、ごく一部をあげる。

以下の例は複数の人物が動作主で自動詞であるものが多いが、他動詞的で被役者の複数性を表示する可能性がある例もみられる²⁰⁾。

(17) *STH* 1 18:11.10 (類例: *STH* 1 24:4.16 他) (初期王朝期)

/複数の人物/ *udu-nig₂-ku₂-a ba-su_x-ge-eš₂*
 複数の人物が肥育用の羊のところに立つ。

(18) *TSA* 15: xiv 13 (初期王朝期)

/複数の人物/ *ba-su_x-ge*
 複数の人物が... に立っていた。

(19) Gudea Cyl.A xx 23 [Edzard, *RIME* 3/1] (同例: Gudea Cyl.B i 11) (Ur III 期)

^d*a-nun-na u₃-di-de₃ im-ma-š_u₄-š_u₄-ge-eš₂*
 Anunna の神々が感嘆して立っていた。

(20) Michalowski, *LSUr* 446, 448 (類例: Hoe and Plough 31

[ETCSL 5.3.1]) (前二千年紀)

gu₂ ki-še₃ gal₂-la-bi ba-e-su₈-su₈-ge-eš₂ kur₂-re ba-ab-lah₃-e-eš₂
.... uru-kur₂-še₃ ba-e-re₇(DU:DU)-eš₂
 彼らは降伏して、立つ(てい)た。彼らは異国の[?]に連れ去られ
 (てい)た。... 彼らは異国の町に行った。

20) ただし単数の動作主をとる自動詞文で{sug}があらわれる例外的な用例がある。
 Šulgi B 123-124 [ETCSL 2.4.2.2]: *šeš gu₅-li-gu₁₀ šul^dutu-gin₇ za₃-še₃ pirig-gin₇ su₈-su₈-ge-ga₂*
 「私の兄弟で友人たる若きウトゥ神のように、私はライオンのように速く走り、」

(21) Išme-Dagan H, 4 [ETCSL 2.5.4.8] (前二千年紀)

dingir an-na an-na bi₂-su₈-ug mu-dug₃ im-mi-in-sa₄
(Enlil 神は) 天の神々を天に立たせる。彼らによい名をつける。

他の例：

ba-su_x-ge-eš₂ [TSA 13: v 4 (類例: TSA 13, V 10)] (初期王朝期); i₃-su_x-ge-[x²][Westenholz, *ECTJ* 5:10-11 (*TMH* V 5)] (初期王朝期末～アツカド期初); mu-na-da-šū₄-ge-eš₂[Gudea Cyl.B xi 13-14 [Edzard, *RIME* 3/1]]; mu-da-an -šū₄-šū₄-ge-eš₂ [Gudea Cyl.A xiv 3-4]; i₃-ib₂-šū₄-ge-eš₂-am₃[*NG* 126:16-17 (*RTC* 295)]; nu-ub-šū₄-ge-ša-am₃[*NG* 209:72 (*TMHC NF I-II* 271)] (Ur III 期); im-ma-su₈-su₈-ge-eš [Cohen, *ELA* 353-354]; mu-un-na-su₈-ug[Hoe and Plough 31 [ETCSL 5.3.1]]; ba-an-su₈-ge-eš[Winter and Summer 107[van Dijk, *La Sagesse suméro-accadienne*; ETCSL 5.3.3]] (前二千年紀)

{sug}に{eš}が後続するときはほぼ規則的に-ge-が挿入される。-geで終わる(18)のような例は珍しい。後続要素を伴う場合の-ge-が、単に同じサインを用いる複数語基(sub)「行く(複数)」との区別のためだけの表記であるかどうかは議論の余地があり、-ge-の部分に *marû* アスペクトの{e}が含まれる可能性も考えられる。(21)他の例にみられる後期の su₈-ug は後続要素がない場合にみられる表現である。(21)は明示的ではないが単数の使役者 (= Enlil 神)があり、被使役者である天の神々の複数性が複数語基によってあらわされている。

2 無生物の複数性を表示する{sug}

無生物の複数性を表示する{sug}の例である。{durun}の場合と異なり、基本的に動物に使われることはない。無生クラスの動物の場合に{sug}の代わりに gin.gin があらわれることを吉川 1979: 681-83 が指摘している²¹⁾。

21) 吉川 1979: 682 を参照。DP 212, II 4: /複数の動物/ mu-gin-gin-na-am₆; *Nik* I 157, vi 5-v 6: /複数の動物/ e₂-gal-la mu-na-gin-gin-na-am₆ [Selz, *FAOS* 15/1: e₂-gal-še, mu-na-gin-gin-na-kam]、二例とも吉川は「行った」と訳出している。{sug}が{sub}「行く(複数)」の意味で使われることが Krecher 1967: 8-11 によって指摘されている。gub「立つ(単数)」ではなく、代わりに gin「行く(単数)」が重複してあらわれるのは動物に gub が使えないためであろう。

このことから吉川は Agent-governed の{sug}は有生クラスの複数を表示すると解釈し、有生物・無生物両方の複数性を表示しうる Object-governed の{sug}との区別を行っている²²⁾。

しかしながら、本稿では複数語基{sug}が動物に使われないのは複数語基としての{sug}の特徴ではなく、対応する単数形式 gub に由来する動詞の意味的特徴であると解釈する。これについては 2.2 で後述する。動物以外の無生物も自動詞主語にはなりうるため、{sug}についてだけ、有生性に関与するとの記述は不要である。複数語基の複数性はすべて有生性には無関係であるとまとめられる。

以上から{sug}については、動物以外の無生物(2.1)と動物(2.2)に分けて考察する。

2.1 動物以外の無生物の複数性を表示する{sug}

(22) Gudea Cyl.A xxiv 18, 26-27 [Edzard, *RIME* 3/1] (26-27 の類例: Cyl.A xxvi 20; xxix 5) (Ur III 期)

18) dub-la₂-bi am-gin₇ mu-š_u₄-š_u₄

その門を野牛のように立てた。

26-27) e₂-a dub-la₂-bi š_u₄-š_u₄-ga-bi la-ha-ma abzu-da š_u₄-ga-am₃
 家にはその門を立て、Lahama 像を Abzu の側に立てる。

(23) Cohen, *ELA* 312, 314 (前二千年紀)

bur-gal-gal an-ne₂ ba-su₈-su₈-ug ... bur-i-gi₈-an-na da-bi-a
 ba-su₈-ug

大きなボールが天に向かっておかれた。... igi.anna ボールがその側におかれた。

(24) Warad-Sîn 8, 18-20 [= Thomsen (1984:131)] (前二千年紀)

IR₃-^aEN.ZU (...) ^{urudu}alan gal-gal(-la) (...) bi₂-in-su₈-ga

大きな銅像を立てた Warad-Sîn

22) 吉川 1979 は Agent を動作主ないし主語として、また Object を目的語として用いている。

他の例：

š_u₄-ga-bi[Gudea Cyl.B xvii 7; Cyl.B xvi 11[Edzard, *RIME* 3/1]] (Ur III 期) ; su_s-ga-še_s[Iddin-Dagan A 197 [ETCSL 2.5.3.1]]; su_s-su_s-ga-še_s[Iddin-Dagan A 197 [ETCSL 2.5.3.1]]; su_s-ga-ni[Šulgi V 25 [Frayne, *RIME* 3/2, Šulgi 1.2.54, 25](Chiera, *SRT* 13)]; su_s-ga-bi[Cooper, *Curse of Agade* 131]; su_s-su_s-ga-bi[Cooper, *Curse of Agade* 229] (前二千年紀)

(22)などにみられる分詞形は動詞語基の前に接辞もなく、{sug}が他動詞的であるか、自動詞的であるかを明示しない。また(23)は後期の例であるが、動詞語基の前の接辞が ba- だけであり、文脈上も明らかな動作主がなく、自動詞的である可能性が高い。統語関係を判断するのは難しいが、{sug}の複数性は全て「立つもの」に関与するということはできる。

吉川 1979 では他動詞としての{sug}や{durun}は無生クラスの事物を目的語とし、普通三人称複数有生接辞{eš}をとみなわないとするが、少なくとも後期には、(25)や(26)のような例がみられる。従来(25)については{eš}を解釈しないまま、自動詞として訳され²³⁾、また(26)は複数語基と{eš}がともに使役者の複数性を示すと解釈されてきた。しかしながら本稿で確認できるように、{eš}が無生物に対応することはなく、また複数語基が使役者({sug}の場合は「立たせるもの」)の複数性を表示することはない。(25)や(26)では{eš}が使役者である有生物の複数性を、複数語基{sug}は「立つもの」である無生物の複数性を示すと解釈するのが妥当である。複数語基と{eš}がそれぞれ別の事物の複数性を明示的に表す例としてはほかに{lah}の場合がある。{lah}については(57)、(58)で例を確認する。

(25) Civil, Sumerian Flood Story 201 (前二千年紀)

im-hul-im-hul im-si-si-ig du₃-bi teš₂-bi i₃-su₈-ge-eš

彼ら (= 神々) は imhul 嵐と imsig 嵐を全て一緒におこした。

(26) Lahar and Ashnan 76 [Alster and Vanstiphout, *ASJ* 7(1987)] (前二千年紀)

kalam-ma mu zag-še mu-da-su₈-su₈-ge-eš

23) Civil の訳は嵐が存在したという自動詞的なもので、{eš}の解釈が不明である。この行は 5 コラムの冒頭にあたり、4 コラムの下部は欠損している。

(人々は) 国土において名²⁴⁾を端まで行き渡らせる。

上の二例において{sug}は「立つもの」の複数であるから、それぞれ無生物の嵐と名の複数性に関与し、{eš}はその動作をおこす使役者の有生物(人もしくは神)が複数であると解釈できる。複数語基と三人称複数接尾辞が別の事物の複数性をそれぞれ表示している。複数語基が使役者の複数性に関与する例は他になく、(25)について他の解釈は難しい。「立つもの」が単数であれば、使役者が複数であっても複数語基が用いられることはない。例(27)のように単数形式のgubが使われる。

(27) Dumuzid and Geštinanna 18 [ETCSL 1.4.1.1] (前二千年紀)

guruš-e mu-ni-in-gub-bu-de₃-eš mu-ni-in-tuš-de₃-eš

彼らは若者を立たせる。彼らは(彼を)座らせる。

2.2 動物である無生物の複数性を表示する{sug}

(28)は{sug}が動物の複数性を表示する非常に珍しい例である。{sug}は他の複数語基と同様、無生物の複数性を表示できるが、先に述べたように動詞の意味における制限があるため、数が少ないと仮定する。

(28) Sumerian Temple Hymn, 485 (TCS III)

^dutu-ur₂ maš₂-anše u₂-a x mu-ni-in-su₈(-ug)

Utu 神のために野生動物が草の上にいる。

対応する単数形gubが動物に用いられる例は次にあげられる。数多いgubの全体数に比し、数が非常に限られる²⁵⁾。(29)と(30)は、(28)と類似の文脈であると考えられる。(30)は否定で用いられているが、これらの例で動詞は動物があるべき状態にいる好ましい様子をあらわす。

24) 文脈上からはmu「名」は単数か複数かはっきりしない。

25) これらのgub以外にUr III期の行政経済文書では、gud-apin-gub-ba テクスト等に牛やロバなどの農耕用家畜について、gub-baという記述がみられる。この表現はla₂-ni、zi-ga、ri-ri-gaなどの用語と対立して使われ、動詞としてあらわれないことから、同時期の行政経済文書の術語である可能性が高い。意味が未確定であるこの用法については今後の検討課題にしたい。また牛などにたとえられた神や町が「立つ」という表現は文学作品に多くみられる(EWO 252; 375; LSUr 52; Sulgi X 84; Sin-iqišam A 13他多数)。

(29) Inana et Ebih 124-126 [Attinger, ZA 88; Limet, Or 40]

šeg₃ lu-lim-bi ni₂-ba mu-un-lu²⁶⁾ am-bi u₂-lu-a mu-un-gub
darah-bi ha-šu-ur₂-hur-sag-ga₂-ka e-ne-su₃-ud-bi im-me
šeg₃ や lulim が自ら増える。野生の雄牛は青々と茂った草の上に
立つ。darah 鹿は山の hašur の木のところで交尾をしている。

(30) Michalowski, LSUr 6-8

tur₃ gul-gul-lu-de₃ amaš tab-tab-be₂-de₃ gud-bi tur₃-bi-a nu-
gub-bu-de₃ udu-bi amaš-bi-a nu-dagal-e-de₃
牛小屋が破壊されるべく、羊の柵は壊されるべく、その牛はその
牛小屋で立たぬよう、その羊がその羊の柵で増えぬよう、

これらの文学作品の例から {gub} や {sug} が動物について使われるの
は、限られた特定の文脈であることが推測される²⁷⁾ よって {sug} も
{durun} と同様に自動詞であるか他動詞であるか、また有生性にかかわ
らず、その動作を行う、すなわち「立つもの」の複数性を表示すると考
えられる。

複数語基 {sug} の表記は基本的に初期王朝期が su_x(DU.DU).g、Ur
期（グデア碑文と裁判文書）が šu₄.g であり、後期（前二千年紀）では
su_s(DU.DU).g²⁸⁾ であられる。後期の su_s-ug の表記は(21)、(23)など
にみられるように後続する要素がない場合に用いられる。{sug}{su-ug}
は NBGT の記述によると、marû である。{sug} 自体が marû 形式であ
るとは考えにくく、この記述の意味は検討の必要がある。テキストにお
いて {sug} に marû 標識 {e} が後続すると単純に断定できる例がほとんど

26) Attinger はこのサインを lu ではなく、durun²⁾ とする。

27) 動物が「立つ」という表現について gub は用いられないが、それに代わる
表現は不明である。「(複数の動物が)いる」という意味では {durun} や後述の
{se} が使われる。{se} の用例は Ur III 期から減少する。Steinkeller, SEL
1(1984)は前三千年紀においては lug₃ (LUL)が動物単数に、ti が人間単数に、
se₂ が人間複数と動物複数に相補分布的にあらわれることを指摘する。

28) より後の前一千年紀の資料に su_s.g に対応して šu₂.g の例が見られる。
Cohen, Canonical Lamentations, USUMGIN NI SIA 41: dim₃-me-er-an-na
mu-un-su₈-su₈-ge-eš: me₃-su₈-su₈-ge-eš mu-e-ši-šu₂-šu₂-ge-eš 「天の神々
が立つ。彼らはあなたに対して立つ。」su_s.g と並べて šu₂.g と記されるが、前
一千年紀の新しい variant であると考えられる。

ない。判断は難しいが、{sug}に -ge-が後続する場合、*marû* の{e}が表示されていないかどうか今後調べる必要がある。三人称複数接辞にかんしては{durun}と同様に{eš}が後続するが、{ne}の後続例はない。

{sub} 「行く」

で扱う{ere}「行く」とともに gin(DU)「行く(*hamtu*)」/du(DU)「行く(*marû*)」に対応する複数語基である。gin「行く」だけが、二形式の複数語基をもつ。*MSL* II p.144, 7-9 など多くの資料から DU:DU が「行く」という意味の複数語基として su と re の音価を持つことが知られる。su_s と re₇ が同じアッカド語で訳されることから、Steinkeller 1979、Thomsen 1984 など多くの研究者が動詞のアスペクトによる形式の違い、すなわち re₇ を *hamtu*、su_s.b を *marû* と解釈している。この見解は(31)の NBGT の記述に基づく。しかしながら{sub}と{ere}が単にアスペクトによる対立形式とすることには疑問の余地があることを以下で論じたい。

この{sub}は II で扱った{sug}と同じサインで表記される。両者の区別は次のサインにあらわれる子音が g であるか b であるかによってなされる。

(31) NBGT II 3-4 [*MSL* IV, p.148]

DU:DU	= a-lak	MEŠ	<i>hamtu</i> (UL ₄)	「行く	複数	<i>hamtu</i> 」
[DU:DU]-be ₂	= a-lak		<i>ma-ru-u₂</i>	「行く	複数	<i>marû</i> 」

まず、この(31)の NBGT の解釈は、Black 1991 をはじめ、(31)の 1 行目の DU:DU を re₇、2 行目の DU:DU を su_s と読むのが一般的である。しかしながら re₇ と su_s は同一のサインである。(31)の 1、2 行目を re₇ と su_s-be の対立ではなく、su_s と su_s-be との対立と解釈可能である。su_s-be₂ という形式は実際のテキストでは後接要素なしではほとんどあらわれない形であるが、*marû* の要素{e}の後続を示すと解釈できる。単に b で終わることを示すためには、su_s-ub との表記も可能である。su_s の語基それ自体が *marû* 形式であるのならば *marû* 標識の{e}を表記する必要性はない。「行く」の複数語基 DU:DU の読みに関しては 3 節でも述べる。

{sub}については、3節で扱う OBG T III-VII に多数の例があるが、それ以外のテキストで確実に{sub}であることが確認できる例はあまり多くない。特に Ur 期までの例が極めて少ない。{sug}に対応して šu_{4.g} はみられるが、{sub}について šu_{4.b} はない。{sug}の場合と同じく、後期においては後続要素がない場合に su_s-ub の表記がみられる。

1 有生物の複数性を表示する{sub}

自動詞主語の動作者もしくは使役的他動詞文の被使役者が複数である。

(32) TCS I 173: 9 (BM 29893) (Ur III 期)

kaskal-še₃ i₃-**su-be₂-eš**²⁹⁾

彼らは遠征に行く。

(33) TCS I 5: 2, 23 (BM 134635) (Ur III 期)

gu₂-še₃ a₂ he₂-ga₂-ga₂-e gu₂-e ma-an-**su₈-be₂**³⁰⁾

..... 彼らはこちらに？私のところに来る。

(34) Cohen, *ELA* 335-336 (前二千年紀)

nam-lu₂-ulu₃ kiši₆ ki-in-dar-ra-gin₇ aratta^{ki}-aš ni₂-ba mu-un-**su₈-be₂-eš**

彼は人々を割れ目の蟻のように彼らを自ら Aratta に行かせた。

(35) Cohen, *ELA* 479 (前二千年紀)

uru-na udu-gin₇ igi-ni hu-mu-un-**su₈-ub**

彼の町では彼らは羊のように彼の前に行く。

他の例：

mu-**su₈-be₂-eš**[Falkenstein, *ZA* 55 (1962: 52, n.154) (*AnOr* XXVIII 123, *TCL* XV 18 I 2)]; **su₈-su₈-ub** [(x)][Išme-Dagan X, 2 [Sjöberg, *ZA* 63 (1974: 40)]]; **su₈-su₈- ub** [Išme-Dagan W, B6-7 [Marie-Christine,

29) su で表記されるたいへん珍しい例である。

30) TCS I の翻字に従う。コピーがなく、DU.DU と DU:DU のどちらであるかサインを確認できない。

SANTAG 2]); he₂-em-da-**su₈-su₈^{su-su}-be₂-eš**[*UET VI/1* 103:42-43 [= Thomsen 1984: 135]]; i₃-**su₈-be₂-en-d**[e₃-en][*TMH NF* 3 5:24 [= Krecher 1967: 3]] (前二千年紀)

2 無生物の複数性を表示する {sub}

無生物の複数性を表示する例は数が少ない。

(36) *TSA* 1, xii 4-5 [= Steinkeller 1979: 61] (初期王朝期)

/複数のもの/ ^gisgigir uru gir₂-su^{ki}-ta **DU.DU-ba-bi** ba-tum₂
 複数のもものがその Girsu から来た車で運ばれた。

(37) Michalowski, *LSUr* 43 (前二千年紀)

e-el-lu šir₃ gud **su₈-su₈-ba** eden-na nu-di-de₃
 牛 (の群) を追う歌が平原で歌われぬべく、

Ur III 期以前の、su_x(DU.DU).b の例は少なく、現在筆者が確認できる例は(36)に限られる。今後他に例がどの程度みられるか確認する必要がある。{sub}に{eš}が後続する場合の動詞アスペクトについて次節でOBGTの記述を検討する。

3 OBGTにおける複数語基「行く」に関する記述

OBGT (Old Babylonian Grammatical Text)は、古バビロニア期 (前二千年紀初) にバビロニア人がシュメール語の文法を記述するために作成したテキストである。この中に動詞「行く」が様々な動詞接辞をともなう形式を扱った箇所がある。そのうち三人称複数有生接尾辞{eš}があらわれる場合の記述を基に、その場合の動詞アスペクトについてバビロニア人の理解を確認する。

シュメール語の平叙文の *hamtu* 形式はアッカド語動詞の時制・アスペクト形式の preterite もしくは perfect で訳され、シュメール語の *marû* 形式はアッカド語の durative で訳出される。DU:DU「行く」に後続要素がある箇所では、-be₂-の有無によって規則的にアッカド語 (斜体字で表記) の動詞形式が異なることがわかる。つまり、(38)のように-be₂-がある場合はアッカド語で durative (下線部) で訳されるのに対

し、-be₂-のない(39)は preterite (下線部) で訳出され、-be₂-の有無で異なる形式で訳出されている。

(38) *MSL* IV, *OBT* VII 295-297 (類例: VII 295-297, 298-300, 301-303, 304-306)

[in-ne-s]u₃(DU:DU)-be₂-eš i-la-ku šu-nu-ši

彼らが彼らのところに行く。

in- ne -su₃(DU:DU)-be₂-en-de₃-en ni-lak šu-nu-ši

私たちが彼らのところに行く。

in- ne -su₃(DU:DU)-be₂-en-ze₂-en ta-la-ka [šu-n]u-ši

あなたたちが彼らのところに行く。

(39) *MSL* IV, *OBT* VII 310-312 (類例: VII 307-309)

i -im-ne-DU:DU(!)-eš il-li-ku-nim šu-nu-ši

彼らが彼らのところに来た。

[i-i]m-ne-DU:DU-en-de₃-en ni-il-li-kam šu-nu-ši

私たちが彼らのところに来た。

[i-im-n]e-DU:DU-en-ze₂-en tal₂-li-ka-nim šu-nu-ši

あなたたちが彼らのところに来た。

また一人称の希求である ga-に DU:DU が後続する場合、-be₂-のない形があらわれ、二人称・三人称の希求である he₂-のあとには-be₂-が後続してあらわれる。ga-は基本的に *hamtu* 形式をとり³¹⁾、希求の場合の he₂-は *marû* 形式をとる。これら希求の形式はアッカド語の precatative で訳出される。

(40) *MSL* IV, *OBT* VII 102-104 (類例: VII 283-285 など)

ga₂-a-mu-e-en-ze₂-en al-ka-a-nim a-na ši-ri-ya

私のところに来い。(二人称複数命令)

ga-mu-e-ši-DU:DU-en-ze₂-en i ni-il-li-ka-ak-kum

私たちがあなたのところに行こう。

31) ga-は単数の場合、常に *hamtu* 形式をとる。一方複数の場合、常に一人称複数接尾辞{enden}を伴い、複数語基か動詞の重複形をとる。*marû* 形式の場合もみられる[Thomsen 1984: 200-201]。

he₂-mu-e-ši-DU:DU-be₂-eš *li-il-li-ku-ni-ik-kum*
 彼らがあなたのところに行くように。

(41) *MSL* IV, OBG_T VII 114-116

gin-na-an-ze ₂ -en	<i>al- ka</i>	行け。(二人称複数命令)
ga-gin-en-de ₃ -en	<i>i ni-il -lik</i>	私たちが行こう。
he ₂ -en-su ₈ (DU:DU)-be ₂ -eš	<i>li- il-li-ku</i>	彼らが行くように。

この複数語基のAspectに関して、(40)と(41)の3行目では、二人称・三人称希求の he₂-に後続して動詞があらわれ、アッカド語訳も precativative であることから、動詞は *marû* 形式が期待される。そしてこれらの箇所では -be₂- が挿入される形式 [su₈(DU:DU)-be₂-eš] があらわれる。これに対し、(40)と(41)の2行目の ga-のあとは一貫して -be₂-のない形式 [DU:DU-en-ze₂-en] であり (OBG_T VII 100, 103, 106, 109, 112, 118, 121, 124) -be₂-を伴う形式 [su₈(DU:DU)-be₂-en-ze₂-en] の形はみられない。この差異が後続する要素によるものでないことは、次の例から示される。動詞接辞 al-に後続する例で、-be₂-を伴う形式があらわれる。この場合 al-が状態性を表すため、*marû* 形式が用いられているのであろう。そして {eš}、{enden}、{enzen}の前に -be₂-が表記されている。

(42) *MSL* IV, OBG_T VII 126-128 (類例: 129-131 他)

al- su ₈ (DU:DU) -be ₂ -eš	<i>i-il-la-ku</i>	彼らが行く。
al-su ₈ (DU:DU)-be ₂ -en-de ₃ -en	<i>ni-il-la-ku</i>	私たちが行く。
al-su ₈ (DU:DU)-be ₂ -en-ze ₂ -en	<i>ta-al-la-ka</i>	あなたたちが行く。

三人称複数有生接尾辞と動詞Aspectに関して、OBG_Tでも他のテキスト中と同じく、{ne}は一貫して *marû* 形式の場合にだけ後続する (OBG_T III 97-98; 155-156 他)。しかし一方の {eš} はアッカド語で preterite で訳される(39)のような場合だけでなく、durative で訳出される(38)のような場合にもあらわれている。また -be₂-がないものが *hamtu* 形式で、-be₂-があるものが *marû* 形式であると認識されていることから、{eš} は両Aspect形式に用いられるといえる。このことから筆者は従来一般的な見解とは異なり、{eš} が *hamtu* と *marû* のAspe

クトどちらにも用いられると考える³²⁾。

この OBG 7 の記述は、-be₂がないものが preterite で、-be₂があるものが durative であると当時のバビロニア人によって認識されていたことを示すもので、従来の解釈、すなわち-be₂がある場合が su₈ であり、ない場合は re₇ であるという解釈を積極的に支持する根拠はない。どちらの場合も su₈ と読む可能性がありうる。アスペクトの対立が {ere} : {sub} という動詞形式で表されるのか、{sub} に後続する marû 標識 {e} の有無によるのかは断定ができない。{sub} も他の複数語基と同様に複数接尾辞 {ne} が後続する例はなく、筆者は sub と sub-e でアスペクトが対立していた可能性があると考ええる。

{ere} 「行く」

{sub} と同じく、gin (DU) 「行く (*hamtu*)」 / du (DU) 「行く (*marû*)」に対応する複数語基である。初期王朝期は er_x(DU:DU) で記され、Ur III 期は e.r もしくは er と表記される。(e-)re₇(DU:DU) の表記は後期にあらわれる。Ur III 期の分かち書きが e.r であり、i.r がみられないことから、Ur III 期の表記を ir ではなく er とし、初期王朝期の形式を ir_x ではなく er_x と仮定する³³⁾。また複数語基の形式を {ere} と仮定する。Ur III 期まで用例が少ない複数語基 {sub} 「行く」と異なり、Ur III 期以前の行政経済文書にも多くみられる。後期テキストでは方向格の動詞接

32) 三人称複数有生接尾辞 {eš} は通常 *hamtu* で用いられると解釈されるが、先行研究においては Attinger 1993: 152; 216-227 が {eš} を *hamtu* 形式、非命令形、non-cohortative (=O と S) と *marû* (S) の三人称複数有生とする。

33) Ur III 期の分かち書きに用いられる IR サインの音価には ir と er の両方がある。この場合の翻字は研究者によって異なる。また ir には後期に多用される「運び去る」という動詞もある。この動詞は複数語基とはされないが、tum₂ (DU) 「運ぶ」の emesal との議論もあり、今後検討する必要がある。cf. Tinney, *Nippur Lament* 101: mu-un-ga-bi tum-e ba-ab-ir-ra-am₃; Civil, *JNES* 26 (1976: 207) (SBH 57, 35-36) [= Steinkeller 1979: 62, n.16]: un-zu ma-a i₃-DU:DU-eš me la-ba-DU^{ir}-ra la-ba-gub en₃-zu, ni-šu-ka e-ka-a iš-šal-la a-a-iš it-ta-aš-lal-la

また Ur III 期に re と表記される珍しい例もみられる。Owen, AOAT 22, p.135, 3-5 [= Yoshikawa 1981: 320]: erin₂-ugnim^{ki}-ma-ke₁(!)-ne u₄ kaskal-mar-tu-še₂ i₃-re-ša-a šu ba-ab-ti

辞-ši-との共起が顕著である³⁴⁾。{ere}の後期の用例は Krecher 1967: 3-7 が詳しい。

1 有生物の複数性を表示する{ere}

{sub}と同様に「行く人」の複数性を表示するが、初期王朝期から例が確認され、Ur III 期の例が多い。{ere}には{sub}と同様に三人称有生複数接尾辞である{eš}や{enden}が後続する。

(43) *Nik* I 133:3. 4-6 (初期王朝期)

[...] e₂-gal-ta er_x [DU .DU]-ra-ne i₃-gu₇
王宮から来た...達が食べた。

(44) *UET* III 1377:26 [= Steinkeller 1979: 62] (類例: *UET* III 1229:3; 1054:7' 他)(Ur III 期)

/複数の人物/ e₂ ^dšara₂^{ki}-ta e-ra-ne
Šara 神殿から来た複数の人物

(45) *TDr* 85:4-5 [= *NG* p.62] (類例: *NG* 209:58: nu-um-e-re-eš; 120b:10: i₃-im-e-re-eš)(Ur III 期)

u₄ ⁱi₇-lu₂-ru-gu₂-ta i₃-im-er-re-eš₂-ša-a
河の神のところから彼らが来たとき、

(46) Sladek, *Inana's Descent to the Netherworld* 348 (類例: Dumuzi and Geštinanna 58)(前二千年紀)

⁶¹⁸hašhur-gu-la-ed-en-kul-ab₄^{ki}-še₃ gir₃-ni-še₃ ba-e-re^{re}-eš
Kulab の平原の大きな hašhur の木のところに、彼女のあとに彼ら
は行った。

(47) Inanna G, 19 [Kramer, *PAPS* 107/6 1963:503 (*CT* XLII 13,19)]
(前二千年紀)

34) 後期では re₁ の前に方向格の接辞-ši-とともに、-e-が頻出する。これが方向格と意味機能が近い位置・終止格の接辞であるのか、{ere}の語基の一部であるのかは判断が難しい。

e-re₇^{re}-da-gu₁₀-de₃ e-re₇-da-gu₁₀-de₃³⁵⁾

私が行くとき、私が行くとき、

他の例：

e-ra-ne[*Fish Catalogue* 254:2; *MVN XIII* 196 obv. 2-3; *MVN XIII* 320 rev.1]; **e-ra-ne-še₃**[Legrain *TRU* 305, 3]; **er-ra-ne-še₃**[Sigrist, *SAT II* 913 obv.5]; **er-ra-ne**[Legrain *TRU* 334:5 [= Steinkeller 1979: 62]]; (Ur III 期) ; **ba-e-ši-re₇^{re}-eš**[Dumuzi and Geštinanna 58 [ETCSL 1.4.1.1]] (前二千年紀)

2 無生物の複数性を表示する {ere}

後期の無生物の複数性の例は確認できていない。その理由としては後期の {ere} は re₇(DU:DU) が語基末に子音をとらない形式であり、他の DU:DU 表記の複数語基と区別ができない場合が多く、re₇ と特定できる例が少ないことが考えられる。また後期のテキストはそのほとんどが文学作品であり、動物が「行く」という文脈は本来限られる。

(48) *DP* 83 iii 2-3 (初期王朝期)

gud udu e₂-barag-ga-ta i₃-er_x-ra-am₆

Ebarag からきた牛と羊である。

(49) Limet, *Textes sumériens de la III^e dynastie d'Ur* (1976) No.81 10; Steinkeller, *JCS* 35 (1983:249) (Ur III 期)

gud-udu gir₂-su^{ki}-ta er-ra

Girsu からきた牛と羊

他の例：

er_x-ra-am₆[*DP* 240 i 2]; **er_x-ra-a**[*DP* 53 xi 3-4] (初期王朝期) ; **er-ra**[*Reisner Telloh* 49, 1-4; Lafont-Yıldız, *TCTI* 2 L.3794, 5-8; *JCS* 11

35) ほぼ同じ例が *TLB* 2, 1 II 25 [= Krecher 1967: 5] **e-re₇-da-gu₁₀-de₃**, Krecher: “wenn ich gehe”ほかにみられる。動作主が単数で自動詞的であるこれらの {ere} の複数性については問題である。動作の反復・多回を示す可能性が考えられる。

(1957:77), 1.1-3; *Nik* II 440:1; *Nik* II 440:7 他) (Ur III 期)

初期王朝期においては、{ere}はつねに $er_x(DU:DU)$ で表記されている。後期の表記は $re_7(DU:DU)$ で他の複数語基の $su_8(DU:DU)$ や $lah_4(DU:DU)$ と形式上区別がつかないことが多く、特定できる例は限られる。{sub}と{ere}がともに「行く」の複数語基であり、その複数性が「行くもの」すなわち移動するものに関与することには問題がない。

{sub}と{ere}を比較すると、ともに分詞形が多くみられ、他の複数語基と同じく、ともに{eš}が後続し、{ne}が後続することはない。アスペクトによる分布に大きな違いはなく、必ずしも同じ動詞の異なるアスペクト形式と断定できない。以上のことから{sub}と{ere}がアスペクトによる対立による形式との結論には問題があると考えられる。ただしその場合、ともに「行く」を意味する{sub}と{ere}の違いについて今後検討する必要がある。

{lah} 「連れる・運ぶ」

$tum_2(DU)$ 「連れる・運ぶ(単数)」に対応する複数語基である。初期王朝期は lah_5 で、{sug}や{sub}、{ere}と同じ $DU:DU$ で表記される。アッカド期には $lah_5(DU:DU)$ に加えて $lah_4(DU:DU)$ の表記がみられるようになる³⁶⁾。Ur III 期には分かち書き $la.h$ もみられる。後期は{lah}の後続のサインに h があらわれることはなく、分かち書きもみられない。後期は lah_4 と lah_5 がともに使われる。後期に $DU:DU$ が他の複数語基を表すことはないため、 lah_5 については形式上区別できるが、 lah_4 については、 $re_7(\{ere\})$ や su_8 との区別できず、注意が必要になる。後期のテキストでは「移動するもの」以外に「移動させるもの」が想定される場合は lah_4 と解釈、翻字をする傾向にある。

36) Ur III 期以前において lah_5 と lah_4 が同じテキストにあらわれる珍しい例がある。Edzard, *SRU* 89, II 7-III 1, III 9-10 (*BIN* 8 293) (アッカド期) $ur-si_4-si_4 i_3-gin GIŠ.DU_6.DU_3-lugal-ab-zu-a-ta 2 dumu-AN.SUKKAL im-ma-lah_4(DU:DU)-eš_2 \dots dumu-AN.SUKKAL 2-bi_3!(BI.ME) ba-lah_5(DU:DU)-eš_2$ 「Ursisi が来た。GN から AN.SUKKAL の二人の息子を連れてきた。…… (AN.SUKKAL が) AN.SUKKAL の息子、二人を連れて行った。」使い分けには何らかの意味機能の違いが反映されている可能性がある。

{lah}については Steinkeller 1979: 56 や吉川 1979 が目的語の複数性をあらかず複数語基と述べる。運ばれるものが単数であれば、運び手が複数であっても用いられることはない。{lah}についての用例は Steinkeller 1979 に詳しい。

本稿では、{lah}についても、その複数性は統語的な目的語でなく、主語であれ、目的語であれ、「運ばれるもの(人)」の複数性にかかわると考える。{lah}についての語彙テキストは NBGT II 7-8 ほか、Diri II, An-ta-gal₂ III, VIII などに見られ³⁷⁾、Yoshikawa 1979: 299-300 にまとめられている。

今までにみた他の複数語基と異なり、{lah}は *marû* アスペクト標識(e)の後続が形式上明らかである。しかしながら他の複数語基と同様に三人称複数接尾辞(ne)が後続することはない。

1 有生物の複数性を表示する {lah}

連れていかれる人が複数であることを示す。後続する三人称複数接尾辞の{eš}は{lah}と同じく、連れていかれる人の複数性を示す場合と、運び手の複数性を示す場合があると考えられるが、2節の無生物の場合と違い、形式上区別がつかない。

(50) *Nik* I 164, ii 2-iv 1 [FAOS 15/1 *Nik* 164] (初期王朝期)

PN₁ nu-banda₃ PN₂ unkingal e₂-^dnin-mar^{ki}-x²-še₃ PN₃
aga₃-us₂ PN₄ sipa-bi e-la-lah₅-he³⁸⁾

監督官の PN₁ と軍事司令官の PN₂ が Ninmar の神殿に近衛の PN₃ と羊飼いの PN₄ を連れていった。

37) lah₄ や lah₅ に関するテキストは以下のようなものがある。NBGT II 8 は Steinkeller 1979: 59 による lah₆ (DU)の仮定の根拠の1つとなる。

NBGT II 7-8 [MSL IV, p.148] ^{de}DU = ba-ba-lum ha-am-^{tu}u₂ 「運ぶ hamtu」
DU = ba-ba-lum MEŠ ma-ru-u₂ 「運ぶ複数 marû」

An-ta-gal₂ VIII 145 ^{la-ah}DU:DU = MIN (= ša₂-la-lum) ša₂ a-la-ki

Diri II 241 ^{la-ah}DU:DU = ba-ba-lum

38) Selz 1989: 390 は-he を -he-eš₂ の省略と捉えているが、他の例から {lah} は後続要素がなくても *marû* 標識(e)を取りうるのが分かる。Yoshikawa 1981: 119 は i₃-la(h_x)-lah_x-eš をあらかずしている可能性があるとする。Yoshikawa は {eš} が個々の動作の個別・独立性を強調し、重複が動作の全体性を表す可能性を示唆する。

- (51) Edzard, *SRU* 46:14-15 (アッカド期)
 /複数の人物、PN/ [a-k]a₂-de₃^{ki}-ta [m]u-**lah₅-he-eš₂**
 複数の人物を PN が Agade から連れてきた。
- (52) Fish, *RA* 46/1, p.53: BM 113010 [= Yoshikawa 1981:316-317] 1.3-5
 (Ur III 期)
 lu₂-ma₂-zi-ra-be₂-ne lugal-ku₃-zu ba-an-**la-ah**
 船を壊した人達は Lugal.kuzu に連れていかれた。
- (53) *NG* 202:9 (*TCL* V 6168) (Ur III 期)
 /複数の人物/ PN-e ib₂-**lah₅-e**
 PN が複数の人物を連れていく。
- (20) Michalowski, *LSUr* 446, 448 (lah₅ についての類例: *LSUr* 345)
 (前二千年紀)
 gu₂ ki-še₃ gal₂-la-bi ba-e-su₃-su₃-ge-eš kur₂-re ba-ab-**lah₅-e-eš** uru kur₂-še₃ ba-e-re₇(DU:DU)-eš
 彼らは降伏して、立った。彼らは異国の人[?]に連れ去られた。...彼らは異国の町に行った。
- (54) Išme-Dagan A 343 [ETCSL 2.5.4.01] (前二千年紀)
 sipad kug-zu un **lah₄(DU:DU)-lah₄(DU:DU)-e-ga₂**
 私は民を導く賢き羊飼いであり、

他の例：

mu-**lah_x-he-eš₂**³⁹⁾ [*ITT* I 1066 [translit. only]]; ba-**lah₅-he-eš₂** [*ITT* I 1120:1-3] (アッカド期); mu-na-an-**la-ah** [*NG* 121:8 (*TCL* V 6165)] (Ur III 期)

2 無生物の複数性を表示する {lah}

吉川 1979 が指摘するように運ばれる対象が有生物ではなく、無生ク

39) この例の翻字は *ITT* I に従う。

ラスに属する動物やものになると、その複数性に関与する{eš}はあらわれないことが多い。しかしながら、(57)や(58)のように運び手が複数の場合は{eš}があらわれる。この場合、先の{sug}の場合と同様に複数語基と複数接尾辞がそれぞれ運ばれるものと運び手の複数性を表示することが形式上確認できる⁴⁰⁾。

(55) *Nik I 161, i 1-ii 2* (類例: *Nik I 161 v 6, i₃-lah₅*) (初期王朝期)

1 udu-nita il₂ 1 udu-nita lugal-sa-šuš-gal [ga₂]-udu-ur₄-
ra-ta udu-nig₂-ku₂-a e-ma-lah₅

一頭の雄羊を II が、一頭の雄羊を Lugalšašušgal が毛刈りの小屋から肥育用に連れていった。

(56) Yang Zhi, *Sargonic Inscription from Adab, A661:12* (アッカド期)

..... e₂-ur-⁶ⁱ⁸gigir dumu lugal-ka-ke₄ ba-ab-lah₅-he-eš₂

(.....が彼らによって?) PN₁の息子、PN₂の家に運ばれた。

(57) *MAD 4 126, 1-5* [= Steinkeller 1979: 59] (アッカド期)

3 k[uš(?) u₈(?) GN PN₁ PN₂ x-da mu-lah₄-he-eš₂

(複数の物を) PN₁とPN₂が持っていった。

(58) *TCS 1 196:8-10* (Genouillac *Trouvaille 67*) (Ur III 期)

/複数の羊/ e₂-dur₅ lu₂-HAR-ka-eš₂ mu-lah₆(DU)-la-he-eš₂⁴¹⁾

複数の羊を PN の小屋に、彼らは連れていった。

(59) *MVN XVI 733 Vs.9-Rs.1* (類例: *MVN XVI 687 Rs.6; Hackman, BIN 5 96 obv. 1-3* 他など) (Ur III 期)

40) 運ばれるものが単数扱いの場合は次のようになる。Yang Zhi, *Sargonic Inscription from Adab, A652:17* /穀物、複数の人物/ mu-tum₂-eš₂ 「複数の人物が穀物を運んだ。」

41) Steinkeller 1979: 59 は mu-DU^{h-hc}-eš₂ と読み、lah₆(DU)の根拠としている。本稿でも lah の読みが妥当と考えるが、時期的にまた行政経済文書という資料の種類から読みを振ったとの見方は支持できない。{lah}の重複と解釈、翻字をする。cf. Sigrist, *SAT 1 16, 3-6* (BM 20452): ša₃-gal erin₂ ma-da-ad-ga-še₃ mu-gin-gin-ne-eš₂ DUB-ir₃-ra šu ba-ti

2 ud₅ 1 maš₂-nata₂ gir₃ še-er-ha-an e₂-gal-še₃ **la-ha**
 二頭の雌ヤギ、一頭の雄ヤギを「足」役の Šerhan が宮殿に連れてきて、

(60) NG 120a:6-7;10-11; Fish, *Iraq* V, p.168 (BM 105393) (類例: NG 120b:27-28 (TCL V 6163)) (Ur III 期)

/複数の家畜/ PN₁ igi-ensi₂-ka-še₃ mu-**lah**₅ PN₂ u₃
 PN₃ nibru^{ki}-še₃ **la-he-dam**

PN₁ が Ensi の前に複数の家畜を連れてきた。.... PN₂ と PN₃ が (それらを) Nibru へ連れていくべきである。

(61) Ur-Nammu A 87 [Flückiger-Hawker, *OBO* 166] (前二千年紀)

gud du₇ maš₂ du₇ udu niga en-na ab-**lah**₅-a⁴²⁾

連れてこられる限り (全て) の完全な雄牛、完全な雄ヤギ、太った雄羊を、

他の例 :

i₃-**lah**₅ [ITT II 4396:6-8]; ba-**lah**₅- a [同 4436:5]; mu-**lah**₅-a[同 4436:8] (アッカド期) ; **lah**₅-e-dam [TCTI 2 L.3484:6]; **la-ha**[MVN XIV, 176 Vs.12,5; NG 138:13-14]; ba-an-**la-ah**[NG 138:13-14] (Ur III 期)

後期の lah₄ の例を多くあげていないのは、DU:DU の例は多いが、形式上 lah₄ であることを確定できないためである。

初期王朝期に他の複数語基が重複する例はみられないが、{lah} については(50)や(58)のように語基の一部の重複と考えられる例がみられる。

{se} 「生きる・いる」

ti 「生きる (単数)」に対応する複数語基で、se₁₂(SIG₇)と表記される。

までにみえてきた複数語基とは異なる点が多くみられる。大きな相違点として、まず他の複数語基のサインに対応する単数形の動詞のサインを並べて表記するのに対し、全く別のサインを用いる点。次に後期になる

42) Nippur 版では lah₄、Susa 版では lah₅ で表記される。

と se₁₂ 「生きる」は単数にも用いられる点。第三に吉川 1979 が指摘するように、三人称複数接尾辞{eš}の後続が後期までみられない点である。

sig₇ と翻字をすることが多いが、筆者は se₁₂ と表記する。その理由として Steinkeller, ASJ 7(1985: 195)が初期王朝期とアッカド期のニプールのテキストで{se} 「生きる」の代わりに še が用いられることを指摘していること、これは MSL IV, OBGT I IX, 649-655 の記述からも支持される⁴³⁾。また後期テキストにおいて「緑の・美しい」を意味する場合、SIG₇-ga とあらわれ、多く g が後続するが、「生きる」を意味する場合には g があらわれない傾向にある⁴⁴⁾ ことが挙げられる。(62)の例は「生きる」の場合 se₁₂ の読みを、色彩語の場合 sig₇ の読みを示すと解釈できる。

- (62) MSL XVI, p.425, 194 (A V/3) [si-e] = [SIG₇] = a-ša₂-bu ša₂
 MEŠ 「存在する(複数)」
 MSL III p.127 (S^b I 361) si-ig = SIG₇ = ar-qu 「緑黄色の」

複数語基の{se}は動物以外の無生物に用いられることはない⁴⁵⁾。初期王朝期の行政経済文書では基本的に複数の場合は単数の ti ではなく、複数語基{se}が使われる。

1 有生物の複数性を表示する{se}

自動詞文の動作主であれ、被使役者であれ、「生きる・いるもの」の複数性を表示する。

- 43) se₁₂ が異形態として še をとり、ti に対応することが示されている。se₁₂ と ti はともに単数、複数に使われ、どちらの場合も三人称複数有生接尾辞{eš}を伴う場合は複数と解される。

MSL IV, OBGT I IX, 649-655 (同 661-664 に類例)

me-a an-se ₁₂ (SIG ₇)	[a]-li ₂ -šu	where is he?	me-a an-se ₁₂ (SIG ₇)-e[š]	a-li ₂ šu-nu	where are they?
me-a an-še	a-li ₂ -šu	where is he?	me-a an-ti-eš	a -li ₂ šu-nu	where are they?
me-a an-ti	a -li ₂ -šu	where is he?	me-a i ₁ -ti-eš	a-li ₂ šu-nu	where are they?
me-a an-x	a-li ₂ -šu	where is he?			

- 44) ELA 459: ur na-an-sig₇-sig₇-ge ur na-an-gun₃-gun₃ 「犬は黄色くてはならない。犬はまだらではならない。」、その他 an-sig₇-ga 「青い空」、kiri₆-sig₇-ga 「緑の果樹園」、hur-sag-sig₇-ga 「緑の山」などの表現多数。またこの他に g があらわれない用例として Ur III 期以前の行政経済文書に草や葦を SIG₇ するという表現がみられる。「刈る」と訳されることが多いが意味は確定していない。

- 45) 行政経済文書において sila-a SIG₇-a 「町にある」(SAT 2 309 他)という表現がみられる。この SIG₇ が無生物の複数性に関係する可能性がある。

初期王朝期において se_{12} はつねに複数に対応する。初期王朝期からアッカド期にかけて多く共格の動詞接辞 $-da-$ とともにあらわれる。アッカド期以前のニップールのテキストでは(64)のように $\check{s}e$ があらわれる (Steinkeller 1985)。{ se }の用例は Ur III 期に例がほとんどみられなくなるが、後期になると再び例がみられるようになる。後期の{ se }は{ $e\check{s}$ }を伴い、また単数に対しても用いられるなど用法に変化がある⁴⁶⁾。

(63) *Nik* I 16:5.11-13 [*FAOS* 15/1 *Nik* 16:5.11-13] (初期王朝期)

/複数の女奴隷/ PN $dub-sar-da\ e-da-se_{12}$ ⁴⁷⁾

複数の女奴隷が書記である PN のもとにいる。

(64) *ECTJ* 39 xiv13-14 (*TMH* V 39) (アッカド期)

/複数の人物/ $a-ga-de_3^{ki}-a\ mu-\check{s}e$

複数の人物が Agade にいる。

(65) *Lahar and Ashnan* 38-40 [*Alster and Vanstiphout, ASJ* 7(1987)]
(前二千年紀)

$a-a\ ^d en-lil_2\ lahar\ ^d a\check{s}nan-bi-da-ke_4\ du_6-ku_3-ga\ um-ma-da-an-se_{12}-e\check{s}-a\ du_6-ku_3-ta\ ga-am_3-ma-da-ra-ab-e_{11}-de_3-en-de_3-en$
父なる Enlil 神よ、Lahar 神と Ašnan 神が清らかな丘に生み出された/いるので、私たちは清らかな丘から彼らを出したい。

(66) *Lugalbanda* I 62, 473 [*ETCSL* 1.8.2.1] (前二千年紀)

62) $ur-sag-me-e\check{s}\ ki-en-gi-ra\ se_{12}-me-e\check{s}$

彼らは英雄である。彼らはシュメールに生きる。

473) $sag-ki-ne-ne\ igi-ne-ne\ an-usan_2\ sig_7-ga-me-e\check{s}$

彼らの額、彼らの目について、彼らは輝く? タペである。

46) (65)と同じ文学作品に単数形に対応する se_{12} もみられる。 $se_{12}g$ であらわれ、注意が必要である。Lahar and Ashnan 2-3 [*Alster and Vanstiphout, ASJ* 7(1987)]: $u, an-ne_2\ dingir\ ^d a-nun-na\ im-tu-de_3-e\check{s}-a-ba\ mu\ ^d a\check{s}nan\ nu-ub-bi-tu-da-a\check{s}\ nu-ub-da-an-se_{12}-ga$ 「Anunna の神々が An 神によって生みだされたとき、Ašnan 神(穀物)が生まれていなかったなので、彼が彼らとともに存在せず、」

47) 同テキスト 6.3 に $e-da-ti$ が複数に対応する例がある。この時期通常 $e-da-ti$ は単数に対応する。

(67) Cooper, *Curse of Agade* 17 (前二千年紀)

ki ezem-ma un se₁₂-ge-de₃
祭りの場で人々が生きるべく

他の例：

e-da-se₁₂[*Nik* I 16: R10.3-4, *TSA* 14 Rs.I 2-8 ほか、*STH* 1 の 18, 19, 20, 24, 25 など多数。(初期王朝期) ; se₁₂-[me]- eš [Gilgamesh, Enkidu and the nether world 1.27(*UET* VI 58)[*ETCSL* 1.8.1.4]]; mu-un-se₁₂-eš-am₃ [Lahar and Ashnan 27-28 [Alster and Vanstiphout, *ASJ* 7(1987)]] (前二千年紀)

(66)では SIG₇ に -me-eš が後続する二箇所について、g の有無によって意味の対照がみられる。ただし(67)のように複数語基の場合に g があられる例も少ないながらみられるため、さらなる調査が必要である。

2 無生物の複数性を表示する{se}

無生物の場合は基本的に動物に使われる。初期王朝期からアッカド期にかけて、共格の動詞接辞 -da-とともに用いられ、家畜が誰かのもとで管理されていることを表す。この時期の事例は非常に多く、下記には数例のみを例としてあげる。この用法は Ur III 期以降みられなくなる。

(68) *Nik* I 311:2, 2-4 (*FAOS* 15/1 *Nik* 311) (初期王朝期)

/複数の動物/ gir₂-nun gub₃-kas₄-da e-da-se₁₂
複数の動物が御者の Girnun のもとにいる。

(69) *ECTJ* 81:1-3 (*TMH* V 81) (初期王朝期末)

42 gud PN an-da-še
42 頭の牛が PN のもとにいる。

他の例：

e-da-se₁₂ [*AWL* 103: I 1-II 4 (Fö 8); その他 *RTC* 53; *TSA* 13; *STH* I 17, 25, 26, 27; *DP* 88; 98 など多数] (初期王朝期)

{se}は他の複数語基と異なり、時期的にかなりその用法が変化したことがうかがえる。また SIG₇ サインで表記される動詞は意味が多いが、少なくとも複数語基として「生きる」の意味で用いられるときは時期にかかわらず重複せず、「生きるもの」の複数性を表示すると考えられる。また後期テキストには(67)のように *marû* 標識の{e}が後続する例がみられる。

おわりに

従来の一般的解釈では複数語基の複数性は絶対格名詞の複数性を示すとされる。しかしながら複数語基の複数性は、名詞の格に規定されるものではなく、動詞ごとに定まった項にかかわるものである。すなわち、{durun}「座る」は「座すもの」、{sug}「立つ」は「立つもの」、{sub}と{ere}「行く」は「行くもの」、{lah}「運ぶ」は「運ばれるもの」、{se}「生きる」は「生きるもの」の複数をあらわす。つまり複数語基の機能はその動詞の内項の複数性の表示である。複数語基が複数をあらわしうる項は動作者、被使役者、対象になりうるが、使役者になることはない。この複数語基の複数性は三人称複数有生接尾辞の複数性とは異なるものである。なぜなら三人称複数有生接尾辞の{eš}と{ne}は動作主、被使役者だけでなく、使役者にも対応しうるからである⁴⁸⁾。この三人称複数接尾辞については、同じく動詞人称接辞にかかわる動詞語基直前の名詞要素の問題とともに別の機会に詳しく論ずることとする。

また吉川 1979、Yoshikawa 1979: 302 は複数語基と有生性の関係について、主語の複数性にかかわる場合の{sug}「立つ」だけが関与的であるとしている。しかし本稿で示したようにこれがシュメール語の「立つ」の意味的特徴であるとする、全ての複数語基について有生性は関与しないとまとめることができる。三人称接尾辞が有生物にのみ対応するのに対し、複数語基は有生性に関与しない。この点でも複数語基の複

48) 三人称複数有生接尾辞{eš}と{ne}は複数語基と異なり、使役者の複数性を表示することも可能である。(27)に{eš}の例をあげたが、{ne}については次の例などがみられる。Cf. Sladek, *Inana's Descent to the Netherworld* 353: sipad-de₃ gi-gid₂ gi-di-da igi-ni šu nu-mu-un-tag-ge-ne 「彼らは羊飼いで (= Dumuzi 神) に彼女の目の前で gidid やフルートを吹かせなかった。」

数性と動詞の人称接尾辞の複数性は異なるといえる。

複数語基の重複については、{lah}の語基の一部が重複される例を除くと、前二千年紀以前に重複は基本的にみられない⁴⁹⁾。ただし単一の複数語基と複数語基が重複された場合の意味機能の違いはいまのところははっきりしない。シュメール語の動詞の重複の意味機能としては、動作の多回性や動詞アスペクトがかかわると考えられており、今後の検討課題である。

複数語基のアスペクトにかんしては問題が残るが、NBGTの記述をもとに、単純に{sub}を *marû*、{ere}を *hamṭu* とする従来の見解には疑問があることを示した。本稿から少なくとも複数語基{lah}が *marû* 標識{e}をとり、*hamṭu* と *marû* の両方のアスペクトで用いられることがわかる。さらに{e}があらわれる例は{durun}や{se}についても散見される。またの3節の文法テキストで{sub}について指摘したように、{sug}と{sub}についても{e}によって *marû* アスペクトを表示した可能性が指摘できる。どの複数語基にも、一般に *marû* 形式に後続する三人称複数接尾辞の{ne}が後続しない⁵⁰⁾。現段階で筆者は{sub}を *marû* アスペクト形式ではないと考え、どの複数語基も *marû* 標識{e}の有無によってアスペクトを表示しえたと考えるが、判断にはさらなる考察が必要である。

最後に本稿で議論できなかったが、Ur III 期以前の複数語基の表記法はそれぞれの時期において出土地による傾向がみられる。今後出土地がわかるものについては記述の対象に含めたいと考える。

49) これは初期王朝期からアッカド期の複数語基がサインを横に並べ、また Ur III 期は分かち書きであるという表記上の理由も関係するかもしれない。Ur III 期に *š u₄*{sug}の重複がみられるが、これは *š u₄* はサインが単数の場合と違うものであったため、重複が許容されやすかった可能性がある。

50) 複数語基に三人称複数有性接尾辞{ne}が後続する唯一の例は次の文法テキスト中にみられる。

<i>ana ittišu</i> (MSL I) Tf 2, II 19-22	<i>i₃-su₆-ge-eš</i>	<i>iz-zi-iz-zu</i>
	<i>i₃-su₆-ge-ne</i>	<i>iz-za-az-zu</i>
	<i>al-gub-bu-uš</i>	<i>iz-zi-zu</i>
	<i>al-su₆-ge-eš</i>	<i>iz-zi-zu</i>

今回扱った複数語基の形式は次の通りになる。

	初期王朝期	アッカド期	Ur III 期	前二千年紀
{durun}	durun _s (TUŠ.TUŠ)	durun _s (TUŠ.TUŠ)	du ₂ -ru-un	TUŠ-ru.n; TUŠ.n
{sug}	su _s (DU.DU).g	su _s (DU.DU).g?	šsu ₄ .g	su _s (DU:DU).g; su _s (DU:DU)-ug ^a
{sub}	su _s (DU.DU).b ^b	DU.DU? ^a	su _s (DU.DU).b?	su _s (DU:DU).b; su _s (DU:DU)-ub ^a
{ere}	er _s (DU.DU)	DU.DU? ^a	er, e.r	re ₇ (DU:DU); e-re ₇
{lah}	lah _s (DU.DU)	lah ₂ (DU.DU)	lah ₅ (DU.DU)	lah ₅ (DU.DU)
		lah ₇ (DU.DU)	?	lah ₇ (DU:DU)
			la-ah, la.h	
{se}	se ₁₂ /še	se ₁₂ /še	?	se ₁₂ /še

a: 後続要素のない場合にみられる。

b: 1 例しか確認できていない。

c: {sub}{ere}{lah}の可能性があるが、後続子音がなく判断ができない。

参考文献

- Attinger, P.(1993) *Eléments de linguistique sumérienne*.Vandenhoeck & Ruprecht. Göttingen.
- Black, J. A.(1991) *Sumerian Grammar in Babylonian Theory*. Editrice Pontificio Instituto Biblico. Roma.
- Krecher, J.(1967) Die pluralischen Verba für „gehen“ und „stehen“ im Sumerischen. *Die Welt des Orients* 4, 1-11.
- Steinkeller, P.(1979) Notes on Sumerian Plural Verbs. *Orientalia NS* 48, 54-67.
- Thomsen, Marie-Louise(1984) *The Sumerian Language*. Akademisk Forlag. Copenhagen.
- Yoshikawa, M.(1979) Verbal Reduplication in Sumerian. *Acta Sumerologica Japan* 1, 99-119.
- Yoshikawa, M.(1981) Plural Expressions in Sumerian Verbs. *ASJ* 3, 111-124.
- 吉川 守(1979) シュメール語の動詞における複数表現について 『オリエント学論集』 刀水書房, 679-700.

(京都大学大学院文学研究科 研究員)